

憲法って？

プロローグ 識者に聞く ▶ 5

イラクへの自衛隊派遣 まいになった。米国はこの状況は、北朝鮮があり、合理的で適切な判断だ。これに対応して、テロ組織と闘う。テロリストは必ず自衛隊を狙ってくる。小泉首相はキャンブルに外交官が殺害された直後、出たとも言える。だが、転換した。これがイラクでもあり、この決定を米

米と軍事的一体化を

9・11テロによって、戦時と平時の区別があい

必要だ。米国と協調して争に介入する意思、実力、保はグローバルな同盟に

米と軍事的一体化を

米と軍事的一体化を

東工大教授 橋爪大三郎さん



橋爪大三郎さん

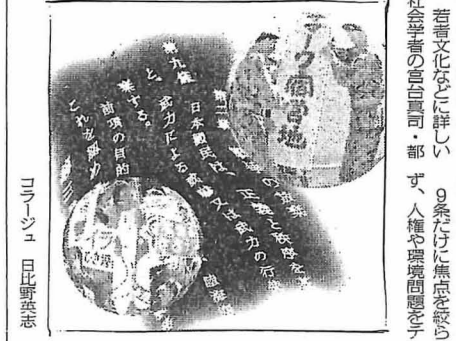
だ。この「憲法」に合わせるべきは九条の条文の方だ。戦力を保持しないという規定を改めて自衛隊を国防軍とする。日本の民主主義のためにも、憲法改正の手続きを踏むことに大きな意義がある。

日本は今後、平和主義の理念をどう生かしてい

はしづめ・だいさぶろう 1948年鎌倉市生まれ。専門は理論社会学、宗教学、現代アジア研究、現代社会論。著書に「言語派社会学の原理」「天皇の戦争責任」「日本人は宗教と戦争をどう考えるか」など。日米軍事同盟のグローバル化、これまでの平和主義からの大転換を主張する。着々と進む日米同盟強化の現実を最も明確に定式化する。ただ、個人主義、自由主義の立場から、日本の民族性を強調する改憲論とは一線を画す。「反米保守」のナショナリズムと厳しく批判する。

対立感薄まる論壇

最近の憲法改正をめぐる議論は、9・11米同時多発テロ、アフガニスタンへの国際部隊の派兵に際して、争いあふれる日本人が、争いを止めるべきという形に進んできた。毎日新聞の世論調査でも、91年の湾岸戦争を境に、憲法改正反対の意見が拮抗する状態から、改憲賛成に転じた。要因として世代交代「アレキサンダー」の不在が



共通する現実志向

共通する現実志向

共通する現実志向

憲法 5

対立感薄まる論壇

対立感薄まる論壇

共通する現実志向

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

◆小泉政権3年 人気の構図はアイドル風



橋爪 大三郎

東京工業大学教授(社会学)

小泉政権が発足した時、3年も続くと予想しなかった。派閥が主流派連合を作り、官僚機構を巻き込み、時々の政策課題に柔軟に対応するのが従来の本格政権長期政権だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

「小泉首相への支持は、アイドル歌手へのそれに似ている。歌が下手だから応援しにくいという心理だ。」

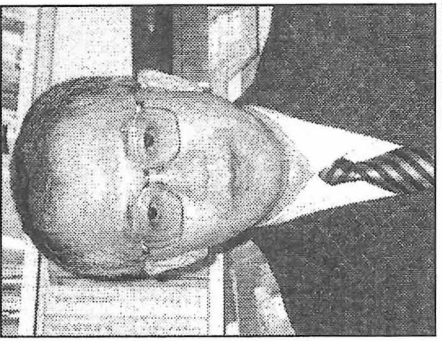
私の視点

ウイークエンド

POINT OF VIEW / Daisaburo Hashizume

The Asahi Shimbun Monday, May 24, 2004

Koizumi's pop-idol status wins over the public



Daisaburo Hashizume

When the administration of Prime Minister Junichiro Koizumi took off three years ago, I never thought it would remain in power for so long. Traditionally, it was the norm for factions to join hands to form the mainstream, drag the bureaucracy to go along with it and flexibly deal with policy issues as they arise to stay in power over a long period. But Prime Minister Koizumi defied the long-established pattern, saying politics led by factional alliance is outdated. When he gallantly declared his intention to break it, I thought he was prepared to "bust" and expected his administration to be short-lived.

quietly thinks and comes up with an answer by himself. With such a personality, however, he may be cut out to be a prime minister. Supreme leaders tend to be solitary. The facial features of most people who become prime minister become uptight soon after they take office because of strain. But that is not the case with Koizumi. By nature, he is not very sociable. Since he is used to being by himself, he appears to enjoy his solitude. Because he does not maintain close personal ties with those around him, he can fire people in a matter-of-fact way. The dismissal of Foreign Minister Makiko Tanaka is a typical case.

Even though Koizumi is unpopular with fellow LDP lawmakers, he can remain in office thanks entirely to voters who remain faithful to him. That is the public mentality behind his popularity. The popularity of pop idols is baseless. They suddenly appear one day and are gone the next before we know it, only to be replaced by new ones. No one can predict their fate. Koizumi is also a politician whose future is beyond anyone's guess.

It is not uncommon for Japanese parents to excessively interfere with their children or for bosses to meddle in the affairs of their subordinates. But the public is fed up with such intense personal relations. They find Koizumi's simple style refreshing. The way the public supports Koizumi can be likened to the way fans support pop idols. They want to root for their idols all the more because they are poor singers. Koizumi advocates policies that are neither too "slick" nor too "sticky."

reacting to such public demand by demonstrating that the government is allegedly protecting citizens in a visible way. With regard to the problem of historical recognition with which Japan remains at odds with its Asian neighbors, Koizumi refused to play up to them and showed no qualms about visiting Yasukuni Shrine. Koizumi can be likened to an entertainer who knows how to catch the public fancy. Be that as it may, we don't actually know what kind of a country Koizumi wants Japan to be. This is because he

No politician knows better than Koizumi that stable Japan-U.S. relations form the foundation of a strong administration. Since the Sept. 11, 2001, terrorist attacks, he fell into step with the change in U.S. policy and went out of his way to dispatch the Self-Defense Forces (SDF) to the Indian Ocean and Iraq despite critical public opinion. But his consistent attitude fostered public trust. The public increasingly wants the government to concentrate on such "far-reaching" affairs as military and foreign policy. Koizumi is

But my prediction proved false. What is the secret behind the administration's unexpectedly long life? It has not made any substantial accomplishments to speak of. The pledge not to issue government bonds exceeding 30 trillion yen annually has been broken. The privatization of road public corporations and pension reform remain unfinished, and plans to privatize postal services are uncertain. Voters have begun to realize that Koizumi was bluffing when he showed his determination to advance re-

The author is a professor of sociology at the Tokyo Institute of Technology. He contributed this comment to The Asahi Shimbun.

reacting to such public demand by demonstrating that the government is allegedly protecting citizens in a visible way. With regard to the problem of historical recognition with which Japan remains at odds with its Asian neighbors, Koizumi refused to play up to them and showed no qualms about visiting Yasukuni Shrine. Koizumi can be likened to an entertainer who knows how to catch the public fancy. Be that as it may, we don't actually know what kind of a country Koizumi wants Japan to be. This is because he

No politician knows better than Koizumi that stable Japan-U.S. relations form the foundation of a strong administration. Since the Sept. 11, 2001, terrorist attacks, he fell into step with the change in U.S. policy and went out of his way to dispatch the Self-Defense Forces (SDF) to the Indian Ocean and Iraq despite critical public opinion. But his consistent attitude fostered public trust. The public increasingly wants the government to concentrate on such "far-reaching" affairs as military and foreign policy. Koizumi is

But my prediction proved false. What is the secret behind the administration's unexpectedly long life? It has not made any substantial accomplishments to speak of. The pledge not to issue government bonds exceeding 30 trillion yen annually has been broken. The privatization of road public corporations and pension reform remain unfinished, and plans to privatize postal services are uncertain. Voters have begun to realize that Koizumi was bluffing when he showed his determination to advance re-

「私の視点」 小泉内閣の三年 「改革をやります」「自民党をつぶせ」と絶叫した小泉氏は、国民の圧倒的な人気を背に自民党総裁に就任。ねじれ構造を抱えた小泉政権がスタートした。

自民党支持が三〇%程度なのに、発足時の小泉内閣支持率は八〇%以上。その大半が無党派層で、自民党政治に反対だから小泉を支持した。政権維持が第一の自民党は、その小泉人気に乗った。反自民の世論に自民党政権が支えられるという、ねじれ構造だ。

このため小泉首相の「改革」は、あいまいで生煮えになった。本当に改革をして、自民党をつぶしてしまつては、政権が崩壊する。かと言つて、改革の看板を下ろせば、国民にそっぽを向かれ、自民党からお払い箱。改革するのかもしれないが、正体をはっきりさせないのが小泉流だ。

ねじれ構造の小泉政権は過渡的な政権である。小選挙区制になって、自民党の派閥の力が弱まり、

党首の顔が重要になった。党内基盤が弱くても、無党派層を取り込めれば、政治力を発揮できる。TV映りがよく、改革をやりそうな顔つきの小泉首相は、野党に政権をゆだねる決心のつかない国民にとって、安心できる選択だった。

そんな小泉政権が、おおかたの予想を越えて三年も続いている。その秘密は何だろう。これといった実績は思い浮かばない。国債三〇兆円の約束はホゴになった。道路公団民営化も年金改革も中途半端。郵政民営化の先行きも不透明だ。雇用も厳しい。景気はやや持ち直したが、民間のがんばりのおかげである。日本はまだ、九〇年代以来の泥沼でもがいている。

小泉首相の本領は、政策より、鋭い政治感覚だ。まず、政権の基礎は安定した日米関係だと肝に銘じている。九・一一以降、アメリカの政策転換に歩調を合わせ、無理でもインド洋やイラクに自衛隊を派遣した。靖国神社でも目先を考えず、頑固なところをみせ

ている。橋本派を切り崩して総裁再選を果たし、人事にも牙えをみせる。リーダーらしく、とっさの判断で見苦しいヘマはしない。

小泉氏のパーソナリティは、首相向きだ。最高権力者は孤独なものである。ふつつ、首相になってしばらくすると、精神的重圧で人が悪くなる。だが小泉首相は、もともと人づきあいが嫌いで、一人に慣れていった。首相の孤独を楽しんでいるふうがある。同じYKKでも、仲間を集めて小派閥を率い、濃い人間関係に足をとられるタイプの加藤氏や山崎氏とは違う。田中真紀子外相を更送したり、抵抗勢力と手を結んだりが平気である。

1/2

政権は、どうやって求心力を保てるだろうか。

ひとつは、本気で改革に取り組むこと。プレインを使いこなし、官僚を手なづけ、自民党で指導力を発揮する。これまでできなかったことを、さあやれと言つても無理かもしれない。

もうひとつは、憲法改正に着手すること。自民・民主両党の協調が必要になるので、首相の立場は強くなる。大連立を含む思い切った手を打つ余地もある。

どちらもできなければ、じり貧のまま賞味期限を迎える。それだけの政権だったことになる。

小泉政治は、メディア政治、イメージ先行の政治だった。イメージがいつまでも実質を伴わないと、やがて国民も愛想をつかす。

そのことを一番わかっているのが、小泉首相自身であろう。国民は首相が、明確な日本の将来ビジョンを語るのを待っている。

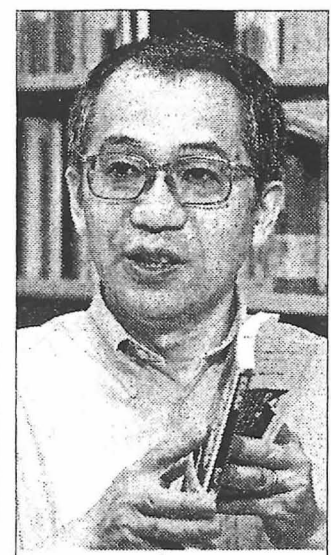
(はしづめ だいさぶろう 東京工業大学教授・社会学)

没の経緯

この原稿を書いたあと、担当の吉田貴文記者から、本稿について「社会の側面から書いてほしかった」と書き直しの要求があり、結局、別にインタビューをして吉田記者がまとめ直すこととなった。5月1日朝刊に掲載されたのはその原稿で、私は手を加えていない。私としては、没になったこの原稿が本当の原稿であると考えている。(2004.5.4)

2/2

論客



橋爪 大三郎氏
東京工大教授。社会学。東大大学院修了。著書に「民主主義は最高の政治制度である」「言語/性/権力」など。55歳。

— 今回の参院選の意義

橋爪 小泉首相が参院選を乗りきると、小泉政権のまま続くのかな、という雰囲気になる。つまり、衆院解散・総選挙も見えてきて、自民党内では「小泉さんでは戦えない」という声が出てくるだろう。小泉政権への中間信任投票の意味がある。

生活に直結する「一票」

橋爪 衆院の小選挙区制導入に、私は大賛成した。政権交代こそ、有権者が主体性を示す方法であり、その道を開くと考えたから、歩みは遅々としていたが、その方向に進んできていると思う。たぶん十分だ。なぜなのか。

橋爪 第一は、衆院に比例代表の部分があることだ。このために少数党が存続して政権のキーストングポストを握るといって、よくわからない状況が生まれてくる。衆院は単純小選挙区制にすべきだ。

橋爪 第二に、政党の側が時代の変化に十分に追いついていない。政治が国民の手に取り戻されたような感じがしたのは、二〇〇一年の自民総裁選ではないか。どこかの県で予備選の開票があり小泉さんが勝った、これどうなる、と大変に

橋爪 生活が豊かになり、「投票などしてなくてもいい」という政治に変化はないし、自分

橋爪 候補者を公募していきなり選挙に出すのは泥縄だ。大学在籍中から卒業直後の人材を政党がスカウトし、党本部などに勤務させながら政治の勉強をさせる。その中から選抜して選挙に出馬させるという方法を探り入れたらいい。

陣論

参院選を問う

参院選が、二十四日公示、来月十一日投票の予定で行われる。首相退陣に結びつけたこともある参院選は、政権にとっての鬼門。衆院との違いが不明なため参院不要論も少なくない。今回の参院選の意義は何か、政党は有権者にどう向き合うべきかを聞いた。

国民が政党を教育する

— 今回の参院選の意義をどう考えるか。

豊永 小泉首相に対する信任投票といえる。各党にとって大事なメッセージだ。たた勝つためだけの選挙なら、国民は「ああ、またやっていると感

— 投票率低下が二大政党化と関係しているところをどう考えるか。

豊永 非常に中途半端だ。日本の衆参両院は、同じような議席配分の論理が働いているから、参院の存在理由が問われかねない。



こよまが 豊永 郁子氏
早稲田大国際教養学部教授。政治学。東大法学部助手、同講師、九州大助教授など歴任。著書に「サッチャリズムの世紀」。37歳。

補にするのは、自民党の独自の一端を示している。ならば民主党なら何かというメッセージを示したい。

— 参院選の結果で首相が辞めた例がある。第二院としておかしくないか。

— 投票率低下が二大政党化と関係しているところをどう考えるか。

豊永 非常に中途半端だ。日本の衆参両院は、同じような議席配分の論理が働いているから、参院の存在理由が問われかねない。

今回の参院選を二人とも「小泉政権への信任投票」に見る。八九年に宇野首相、九八年に橋本首相が、選挙敗北の責任をとって退陣した。参院選の投票率は概して低く、50%を割り込むこともあ

有権者の組織化 各政党の課題に

つた。投票率の低下は選挙全般の傾向だ。その理由を、豊永氏は「二大政党化に疎外感を持つ人が多いから」と指摘した。二大政党化を高く評価する橋爪氏と対照的だ。

ただ、豊永氏は「動員」、橋爪氏は「サポーター集団」などの言葉で、有権者の組織化を政党の課題として挙げた。言わんとするのは、各党に共通する足腰の弱さの克服である。それは、政党が有権者との一体感を獲得する道であり、政治不信、政党不信の解消にもつながる。

— 彼は民主党支持で

— 有権者に一言。

豊永 あきらめず、もし政党不信に陥っているなら人物を見て投票すればいい。投票によってメッセージを発する。そうやって国民が政党を教育するのだ。

深い潮目

戦後59年の参院選

● 中 ●

七月参院選への関心は低い。無党派層を中心に、かなりの有権者が棄権するだろう。もともと参院選は、政権を揺るがす衆院選と違い、争点ははっきりしない。政党化が進んで参議院は、衆議院のコピーみたいになってしまい、面白みもない。わざわざ投票所に足を運ぶ気持ちになりにくい。

「中間選挙」みたい

政治へのインパクトが薄い参院選は、そこで「中間選挙」みたいなものになる。アメリカの中間選挙は、4年ごとの大統領選に挟まれ、大統領選に負けた野党が議席を伸ばすというシンクスがある。有権者のバランス感覚である。どうせ政権が変わらないなら、せいぜい政権への不満を表明しておくことくらいだけだ。今回の参院選には、こうした感覚も働いたろう。低投票率だ

としても、自民党は前回のような大勝を望めなさそうだ。小泉首相は、去年の総選挙を乗り切ったあと、七月の参院選を目標に準備を進めてきた。五月に早めた北朝鮮訪問、六月のサミットで弾みがつくはずだった。けれども、年金未納問題をきっかけに国民の怒りが収まらず、今回は民主党の議席が増え

が、「自民党を変えます」「改革をやります」の改革政権から従来型の自民党政権に、変わってきたせいだと思う。参院選のあと、自民党はますます公明党への依存を強めることになりそうだ。

民主党は、自公連立の小泉政権を攻めあぐんでいいる。寄り合い所帯のうえ、岡田代表の指導力も未知数だ。だが長い目でみれば、民主党の足踏み状態は、将来の政権獲得へ向けたバネになるだろう。

民主党はこれに比べると、有利である。長期的な視点から、これまでのしがらみにとらわれない、合理的な政策を提案できる。年金をめぐる国会の与野党対決も、「明確な対案の民主党」・対・つきはき修正の自民党」のイメージを、国民に訴えるチャンスだった。

参議院で過半数を割り込んだ自民党は、小選挙区選挙を勝ち抜くため、組織票をバックにした公明党との連立を選択した。法案審議を考えると、参議院でも安定多数を確保するため、やはり公明党の協力が不可欠である。

小泉「改革」への評価は、おおむね低い。企業へのアンケートでも、税制改革、年金改革、規制緩和、どれも時間がかかりすぎ、わかりにくく、生ぬるいとみられている。政策の立案や実行の能力が不十分なのだ。改革がなかなか進まない理由

は、小泉首相の指導力不足や、族議員・官僚の抵抗に加えて、民主党の正念場は、目先の議席にとらわれずに、しばらく我慢できるかだ。政策のなかみにこだわる前向きな姿勢を貫き、総選挙を何回か戦って、政権獲得をめざす。今回の参院選で民主党がたまたま健闘するようなら、

連立相手の公明党と調整が必要なたためもある。公明党が反対する改革は、柵あげにせざるをえない。一般に連立政権は、すつきり首尾一貫した政策体系をまとめるのが困難だ。

与野党ともさぼってる

民主党の活路、長期的政策に



橋爪大三郎 東京工業大教授

てほしいという有権者が増えていく。これは、一時的な動きではなく、小泉政権のイメージ

民の目は醒めていいる。内政と同様に外交でも、この国の将来をどう想い描けばいいのか、方向が見えない。長期的なプランを提案し、具体的な政策を練り上げ、国民に訴えるという政治の基本を、与野党ともさぼっている。選挙の争点がぼけてしまっているのも当然だ。

衆議院が小選挙区なら、参議院は、たとえ比例代表。議席の構成が異なるからチェック機能が果たせる。ついでに「党議拘束」みたいな縛りもなくし、議員個人の判断で投票する。これこそ「良識の府」である。

の、与党が政府の味方をしてしまうこと。政府をチェックする役割が少数野党に任せられ、うまく機能しない。牛歩や乱闘は無意味である。衆議院の多数派と無関係に、もっぱら監視機能を果たす参議院への、脱皮を考えてもよいのではないかと。



ことがあったとしても、それは「中間選挙」、有権者の気まぐれにすぎない。小泉外交は、参院選の行方を左右するだろうか。総選挙のあと小泉首相は、自衛隊をサマワに派遣し、北朝鮮を再訪問して拉致被害者の家族五人を帰国させ、サミットではイラク多国籍軍への協力を約束した。再訪朝で支持率は10%ほどはね上がったが、すくまた元に戻った。小泉外交をみる国

今こそ良識の府に 参議院に独自の役割を与えなければ、国民の関心を取り戻せないと思う。手はじめに選挙制度を、衆議院と別にする(1)。

もともと根本的には、立法は衆議院にまかせ、参議院はたとえば、長期的な政策の立案や国政調査、決算・監視機能といった役割に徹する。調査スタッフを充実させて、行政府と対等に当たりあう実力をつけることも大切だ。議院内閣制の問題点は、議会の多数派が政府を構成する

ので、与党が政府の味方をしてしまうこと。政府をチェックする役割が少数野党に任せられ、うまく機能しない。牛歩や乱闘は無意味である。衆議院の多数派と無関係に、もっぱら監視機能を果たす参議院への、脱皮を考えてもよいのではないかと。

はしづめ・だいさぶろう 48年生まれ。社会学者。東京大大学院博士課程修了。著書に『言語／性／権力』(春秋社)、『その先の日本国へ』(勁草書房)、『政治の教室』(PHP新書)など。

2004-1-⑦

POINT OF VIEW / Daisaburo Hashizume

Dull Upper House needs an extreme makeover

The public doesn't seem to care about the July 11 Upper House election. Many unaffiliated voters are likely to skip voting altogether.

Why the apathy? To begin with, unlike Lower House elections in which voters cast ballots to choose the administration, the crux of Upper House elections is vague. With the advancement of political parties, the Upper House has come to resemble a weak carbon copy of the Lower House.

Why take the trouble to go out and vote if it makes no difference, many people seem to think.

Since Upper House elections have little impact on politics, they tend to be like "midterm elections."

Maintaining a balance

In the United States, midterm elections are held between presidential elections. It is often said that the party that lost the presidential election increases its number of seats in the midterm elections thanks to voters' inclination to maintain a balance.

After all, since the government is going to stay in power for another two years, the least the unhappy voters can do is show their disapproval by voting for the opposition.

Such psychology may also affect the upcoming Upper House election. Even if voter turnout remains low, the Liberal Democratic Party is unlikely to score a significant victory as it did in the previous election.

After tiding over last year's general election, Prime Minister Junichiro Koizumi has been gearing up for the July Upper House election. He moved up his plans to visit North Korea in May and attended the Group of Eight summit in June. According to his scenario, both events were supposed to add momen-

tum to his drive.

Actually, however, revelations about his failure to pay into the national pension program set off public anger. As a result, more voters want Minshuto (Democratic Party of Japan) to increase its seats this time.

This is not a passing trend but a result of the changing image of the Koizumi administration. When it took off, Koizumi stressed his determination to change the LDP and advance reform. But as time went by, his administration began to resemble the conventional governments run by the LDP.

After the Upper House election, the LDP is likely to become increasingly dependent on New Komeito, its ruling coalition partner.

The LDP, which lost a majority in the Lower House, chose to team up with New Komeito, which has a strong backing of organizational votes, to win single-seat constituencies. In order to pass bills, the LDP must secure a stable majority in the Upper House and for that, the cooperation of New Komeito is indispensable.

As a result, the LDP's conventional factional dynamics no longer work wonders as they did before. Meanwhile, Minshuto is unable to mount a successful offensive against the LDP.

Minshuto is an odd mixture of people who belonged to different parties. The competence of Katsuya Okada as Minshuto leader is also unknown, and the party now appears to be at a standstill. However, I expect it to be bracing itself for the eventual takeover of the administration in the long run.

By and large, few people appreciate Koizumi "reforms." Most companies also agree that tax-system reform, pension re-



THE ASAHI SHIMBUN

Daisaburo Hashizume

form and deregulation are invariably too slow, hard to understand and half-baked, surveys show.

The administration needs to do a better job of planning and implementing policies to win public support.

The slow progress of reform is partly due to Koizumi's lack of leadership, as well as resistance from bureaucrats and lobbyist lawmakers representing special interests. But that is not the only reason.

He needs to compromise with the LDP's coalition partner, New Komeito. Therefore, he has no choice but to shelve reforms that New Komeito opposes. Generally speaking, it is difficult for coalition governments to form a coherent set of policies.

In comparison, Minshuto has an advantage. It is in a position to take a longer view and freely propose rational policies unfettered by the past.

Minshuto took advantage of its confrontation with the ruling coalition in the Diet over pension reform to boost its public image. Minshuto gave the impression that it is a party with clear-cut policies, unlike the LDP, which only offers stopgap measures.

Minshuto's future depends on whether it can show perseverance for some time without regard to making immediate gains in the upcoming election. If it wants to eventually take over the administration, it should stick to a positive stance to promote policies that it believes in and undergo several general elections as a challenger.

If Minshuto happens to do well in the Upper House elections, it is not more than a result of capricious reactions of voters in a "midterm election."

Will Koizumi's foreign policy affect the outcome of the Upper House election?

After last year's general election, the prime minister dispatched the Self-Defense Forces (SDF) to Samawah in southern Iraq; visited North Korea for the second time to bring to Japan the families of abductees; and promised to have the SDF cooperate with a multinational force in Iraq.

When he made his second visit to Pyongyang, his approval rating went up 10 percent, but it soon dropped to the same level as before. The public is casting a cold eye on Koizumi's diplomacy.

In both domestic and foreign affairs, the Koizumi administration has yet to show a clear future vision for the nation. Proposing long-term plans, forming concrete policies and presenting them to the people are essential elements of politicking.

But both ruling and opposition parties are not making a serious effort to meet that basic requirement. No wonder the issues of the election are vague.

Unless the Upper House is given a unique role, I don't think it can win back public interest.

First, why not adopt an election system different

from that of the Lower House? If the Lower House is made up of single-seat constituencies, the Upper House should adopt proportional representation, for example. Since the makeup of seats is different, it can effectively check the Lower House.

House of wisdom

Furthermore, it should abolish restraints of party decisions and allow individual members to vote at their discretion. Only when they do can the Upper House be truly called "the house of wisdom."

More fundamentally, legislation should be left to the Lower House. The Upper House should concentrate on proposing long-term policies and other functions such as monitoring administrative affairs and settlement of accounts. It is also important to train competent research staff so that the Upper House can deal with the administration on equal terms.

In a parliamentary Cabinet system, parties that hold the majority in the national assembly form the government. As a result, ruling parties always side with the government. It presents a problem because minority opposition parties are left with the task of checking the government. The system does not always work. Such tactics as snail-pacing around the ballot box and scuffling are meaningless.

I think it is time for the Upper House to transform into an institution devoted to monitoring government affairs without regard to which parties hold the majority in the Lower House.

The author is a professor of sociology at the Tokyo Institute of Technology. He contributed this commentary to The Asahi Shimbun.